

資料紹介 Data

法鏡院（池田三津子）著『帰府の記』

来見田 博基

〒680-0011 鳥取市東町2丁目124 鳥取県立博物館

E-mail: kurumidah@pref.tottori.jp

[受領 Received 8 February 2006 / 受理 Accepted 22 March 2006]

Notes on “Kifu no Ki”, a diary written by Hokyoin (1789-1856)

Hiroki KURUMIDA

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

はじめに

小稿で紹介するのは、法鏡院著『帰府の記』一冊である。本資料は、現在毛利博物館（財団法人防府毛利報公会）の所蔵である。

一 法鏡院と『帰府の記』

最初に、日記の著者である法鏡院について解説しておく。法鏡院は鳥取藩池田家に生まれ、萩藩主毛利斉熙に嫁いだ姫君である。寛政元（1789）年に、池田治道（鳥取池田家6代藩主）の長女として鳥取城内で生まれた。名を三津子といった。母美尾（三宅氏・聳雲院）は池田家の御側女中であり、側室として、三津子のほか、兄秀三郎（のちの鳥取藩7代藩主斉邦）、妹庸子の2人を産んだ。ちなみに、三津子が、法鏡院を名乗るのは、夫斉熙が亡くなった天保7（1836）年以降である。

三津子は18歳（年齢は数え年）までを鳥取で過ごした。一口に姫君といっても、鳥取に生まれ、成長してから江戸に移り住む場合もあれば、妹弥子（母は正室の生姫）のように、江戸で生涯を送る姫君もあり、生活環境には違いがあった。

鳥取時代の三津子については、これまでもいくつかの資料で生活の一端が紹介されている。ひとつは、三津子が庸子と一緒に鳥取の吉岡温泉へ湯治に向いた際に、姫君付の側用人鷲見休明が記した日記<sup>1)</sup>である。もうひとつは、文化3（1806）年に、庸子とともに、初めて国元を離れて江戸へ下った旅で、三津子本人が記した日記「きそのミちの記」<sup>2)</sup>である。この旅日記には、添削箇所が多数あり、鷲見休明もしくはその子安歡が添削したものと考えられている<sup>3)</sup>。西林節子氏

は、これらの史料をもとに、三津子と2歳年下の庸子とが、鷲見休明から和歌などの薫陶をうけ、筆跡や言葉遣いにいたるまで強い影響を受けていたことを指摘している。さらに、庸子の旅日記には見聞や感想が丁寧かつ正確に描写してあるのに対して、三津子の旅日記は、道中記の定石をふまえ、そっけない文章であると、その特徴を述べている。柴桂子氏も二人の日記について、気候・地名・旧跡などを詳しく書き留める庸子と、自然の細かい描写が多い三津子との違いを、対比させて述べている<sup>4)</sup>。

今回紹介する『帰府の記』は、『きそのミちの記』から40年がたち、58歳になった法鏡院が記した二作目の旅日記である。

近年、江戸時代の女性が残した旅日記は、220点にのぼることが、柴氏によって明らかにされている。柴氏の統計によれば、女性のうちでも大名出身女性の旅日記は割合として高く、旅に出た年齢も、50代が高い数字を示すという。この統計に従えば、法鏡院は、一番多いタイプの書き手ということになるが、ひとりの女性が青年期と老年期に旅日記を残した例は珍しいのではないだろうか。

さて、そのような法鏡院の日記が作成されるまでの経緯を、内容の検討の前に簡単に紹介しておく。

『帰府の記』作成までの経緯

日記の表題に「帰府」とあるように、この日記は江戸へ向かう道中を記録したものである。旅の出発地は、萩藩領内の山口湯田町である。湯田町といえば、いまでも温泉地として知られるが、江戸時代においても藩主御用の御茶屋が設けられた湯治の場であった。

その湯田に法鏡院が居る理由を少しさかのぼって説明すると、文化7（1810）年に、22歳で毛利家に嫁いだ三津子は、48歳のときに夫と死別し、その後は毛利家の人々を後見しながら、江戸での日々を過ごした。40年近い江戸暮らしのなかで、天保12（1841）年も暮れにさしかかるところ、ひ孫にあたる藩主毛利慶親を通じて、病氣療養のための帰国を幕府に願い出た。

江戸時代、幕末の一時期を除いて、大名の妻子は江戸に暮らすように幕府より統制を受けていた。そのことで、大名家の女性たちが自由のない暮らしを強いられていたようにイメージされがちだが、夫と死別後に帰国が認められることがあった。後家となってから帰国した大名家女性が記した旅日記も少なくない<sup>5)</sup>。毛利家でも法鏡院以前に、貞操院（斉熙の父毛利斉房の室）が帰国した先例があり、慶親の後押しもあって、帰国は認められるところとなった。

ところで法鏡院の帰国願いについて、本論からはやや外れるが、理由を述べた箇所、郷里鳥取に触れた一文があるので、参考までに紹介しておきたい。

何分温泉二而湯療仕候ハ、病勢相弛、自然と葉能も可有之由、醫師共申事に御座候、猶私城下と鳥取同様之土地柄故、弥以相応可仕と奉存候<sup>6)</sup>

願書の差し出し人は、藩主慶親ではあるが、内容的には、法鏡院の郷里鳥取への愛着が感じられる文面である。当時の毛利家では、貞操院が存命ではあったが、奥向きのことや、一族の吉凶事について、影響力をもっていたのは法鏡院のようである。そのため慶親は、曾祖母法鏡院に対して家政向きのことを相談することも多く、法鏡院と敬親との間にかわされた手紙なども残されている。手紙のなかには、藩政に批判的な意見を述べたものもみえ、両者が率直な意見を交わす関係にあったこともうかがえる。

天保14（1843）年閏9月、江戸を出立した法鏡院は、湯田町に新たな御殿を構え、ここで静養の日々を過ごした。そして4年後の弘化3（1846）年9月、病氣も癒えた法鏡院は、江戸へ戻ることを決心するのである。長い前置きとなったが、今回紹介する『帰府の記』はこの江戸下りの旅日記である。

## 二 『帰府の記』について

『帰府の記』の原本は、縦18センチ、横26センチの大きさで、後年のものと考えられる美しい地紋入りの表紙で綴じられている。外題はなく、表紙を開くと、もともとの表紙と思われる紙面に「弘化三のとし午の秋 帰府の記」と記してある。その筆跡から、自筆と

考えられる。ちなみに文字のくせを『きそのミちの記』と比較してみたが、筆跡に大きな変化はないようである。文体の方は、若々しさが消え、格段に落ち着きのある文章のように感じられる。

## 出発と別れ

日記の冒頭部では、湯田での暮らしや、江戸へ戻ることになった動機などが記してある。

出発日である9月3日は、日記全体のなかでも、もっとも記述が多く、内容も充実している。この日は萩城下からも見送りの人々がやってきて、わずか4年間とはいえ、慣れ親しんだ山口の風土を離れ、身の回りで仕えてきた人々との別れることに、淋しい気持ちや名残り惜しさも尽きないようすが記されている。そんな法鏡院の思いは次の一文に集約されている。

四とせの春秋を遊び、山海川のなかれたけわり杯、みも馴ぬ折ふしのなかめ、今爰に有こゝちして、出立んとすも袖曳とゝむる人としなきに、名残尽せず、側なれし人々もたち別るゝ心くるしく、たかるに一言のみ

（以下、断らない限り史料は『帰府の記』）

山口では近くの旧跡を巡り、萩城下、三田尻などの各地に出向くこともあった。山口を離れて約1ヶ月がたち、東海道を亀山から桑名へと向かう旅路の輿のなかでも、

輿のうちつれづれと山口に住馴し湯田の里もいかになり侍りしや、たけ狩、又鮎くみし遊びなどおもへは、只一時の夢にして

と、湯田の里に思いを巡らしている。

## 移動手段

法鏡院の江戸下りは、陸路であった。主要な移動手段は輿である。しかし風光明媚な海沿いの道や、険しい峠道などでは、たびたび輿を降りて歩いている。また雨天の場合は輿に乗っている。たとえば、瀬戸内海沿いの備後国糸崎を通行した際には、悪天候で、せつかくの景色を楽しめずに、その口惜しさを「ほみなし」と表現している。

輿や歩行のほかには、河川では輦や船に乗り換え、桑名から宮への七里の渡しでは桑名藩松平家が用意した御用船を利用している。

街道沿いの村々や町の家並み、庶民の暮らしぶりなど、比較的細かく描写されているのも、法鏡院が自らの足で歩き、強い関心をもって目に映る外のように観察していたからにほかならない。

## 日 数

湯田を旅立った一行が、江戸麻布の萩藩邸に到着したのは、10月12日である。所要日数は40日である。道中では、川止めなどの遅れもなく順調な旅を続けている。日記には「けふは八里の道をゆくことにていとゞつかれなんと、言あへり」とあり、長くとも1日八里程度を目安に移動の予定を組んでいたようである。

それでもものんびりとした旅ではなかったようで、山陽道を御着から明石へ向かう途中では、供人のなかに、巨岩で知られる「石の宝殿」の道案内を見て、「立よりはやといふ人」もあったが、「思ふふしも有りて本道にといそきつゝ行」と、道を外れてまで名所旧跡や、寺社仏閣を訪ねるような寄り道をしていない。その姿勢は全行程を通じて一貫している。

ただ、伏見の藩邸では、旅の疲れを癒すとともに、別件の用事があって、5日間滞在している。

## 経路と宿泊先

江戸までの道筋は、毛利家の参勤交代の道筋と同じで、萩往還を通して三田尻に出て、そこからは、山陽道、西国街道、東海道というルートを通っている。宿泊は、宿場の本陣を利用しているが、近江国の水口宿では、「此頃は京門跡の宮御方御下向の前ゆへ差つとひにて脇の本陣にやとる」とあって、門跡の江戸への下向と重なったために、どこの旅宿も満室で、しかたなく脇本陣に泊まっている。この日の夜は、「いとせまき座敷上下わけかたく立さわき、夜更るまで夢も結はず、いつしか鶏の声聞くより起出る」と、人々の騒ぐ声が気になって、なかなか寝付けなかったことが記されている。

## 詠 歌

旅のなかで法鏡院が詠じた歌は33首にのぼる。内容は旅の心境や目にした風景を詠んだものが多い。安芸国の玖波から廿日市の間にある難所四十八坂では、この先の旅路を思い

分わひぬ思ふも遠き海山をこえ行旅の末を思へはと詠み、伏見の藩邸に到着しても、

はるばると伏見の里に仮ねして東路遠き日数をそしれ

と、不安を抱きつつ、旅を続けていたことがうかがえる。

各地で目にした人々や自然を詠んだ歌には、浦々に暮らす海士たちのようすや、海に浮かぶ島山の情景などが生き生きと詠まれている。安芸国の宮島では

たくひなし海みやらるゝ月影にうかみ出たる沖の

## 嶋山

と、心惹かれた美しい情景を詠み、旅の後半では、所々に姿をみせる富士山に感動し、四首の歌を詠んでいる。その一首には

仰き見ていかにいふへき言葉も及はず向ふ富士の  
まちかき

といったものがある。

歌は、毎日かかさずに詠んでいるわけではなく、旅先での感動や喜びをその都度歌にしている。傾向としては旅の前半に比べて後半は歌の数が減っている。

## 供人たち

法鏡院は、この旅を支えた供人たちへの気遣いも忘れてはいない。周防国の富海を過ぎた峠では、「茶たうへ、くた物さし出たるを供の人々へわかちつゝ」とあり、大井川を渡る手前の休憩所では「供の人々のみ茶なとたうへさせて出ゆく」とある。果物や茶、ときには酒を分かち合って供人の労をねぎらっている。

そんな供人たちへ向けられるまなざしは優しい。旅の出発時刻が大抵は、卯の刻（午前6時頃）と早いため、安芸国の西条では「朝霧に打なひきし千草百草所せきまで歩行人の裾たえかたう見つゝ行」とあったり、岡山城下を出発した朝には、「朝つゆふかく千草打なひき、かち人の裾たへかたくみえたり」と、道端に生い茂る草葉の朝露が、供の裾を濡らして煩わしそうなようすに心を痛めている。

その思いを歌にして、

さしくたる露けきものを旅衣しほれも猶いそくか  
ち人

と詠んでいる。

ところで、法鏡院の下向には何人くらいの供人が随行していたのであろうか。日記には供の人数が記されていない。しかし、それは9月20日に宿泊した西国街道の郡山宿（現大阪府茨木市）本陣の宿帳から判明する。

弘化三年午九月廿日 前日御宿割上下五人御出

参一、大膳太夫様之曾祖母様 御泊 半半

女中廿人 貳百拾文つゝ

侍惣 貳廿式人 百七十五文つゝ

銀貳枚 雨天二付十九日朝御出之節 田代

良助殿江傘式本かし 長門屋本陣

より返済有之筈二て御返無之ゆへ

本陣番豊崎太吉 中島甚吉兩人江

願書差出し置候

傘返済有之候 則跡改役人なり<sup>7)</sup>

この宿帳によれば宿泊者は、女中が20名、侍が22名である。これに宿割の5人と跡改役人2人を加えた49名が供人の数である。ただし、この人数には駕籠舁きや道具持ちといった人夫は含まれていないであろうから、総数はもう少し多かっただと思われる。

### 法鏡院のまなざし

法鏡院の関心は、道中で寺社仏閣や名所旧跡を巡ることよりも、海、山、月といった自然のおりなす美しい風景、街道に軒を並べる民の家、民の生業、さらには祭りに繰り出す人々の風俗といったところに向けられていることが多い。

周防国高森では、

女のすかたも大坂めきてめつらしく、民の家々業のみしけきさま、其身の程々をわすれず、いとたのもしく、はた衣さも百とせのよはひまで賤のわさより外にたのしみもあらず、明暮と年月をかそふる事よと思ふ

あるいは岡山城下では、

吉備宮のまつりとてうかれ女なとよそひつれ、詣ふて侍る人々往来にきはしく、ちかき茶や杯さけたうへ、あされ遊ぶものゝ音も聞え、爰のあたりは大坂の風俗にて、けいこなと打まとひ、夜更るまでにはきはしく

といったように、遊女や芸子たちのようすを、大阪のそれと比較しながら観察している。

また、道中では、稲田の実りに対する関心も高く、田面のことがたびたび記されている。

はるかに田面ひろく列田もみえ、またしき稲葉も打なひきて、豊としと思ふもいとたのもし

法鏡院に限らず、女性たちが、自然や風土への関心から、思いのほか稲田の実りに気を配っていることはすでに指摘されるところである<sup>8)</sup>。

旅の楽しさをかきたてる要素には、休憩に立ち寄る宿場本陣の主の温かいもてなしや、庭の鑑賞などもあった。

此やとりの主心有住居にて、はなれし茶の席杯ものさひて、いとゆかしく、何くれともてなし、旅のなくさめと打寄りて、なかめやるかたも田面ひろく、くた物茶たうへて立出る

備後国赤坂の本陣では、古びた趣ある茶席や、主のもてなしに感動し、また兵庫の生田明神では、

ひそかにさきかけの梅を一えた袖につゝみて、あつまにもちかへらはやと、輿のうちのはな筒にさし侍りて、朝な夕な水そゝくへしと、日毎のなくさめにしつゝ

ものゝふの心はかたく幾世々に朽すさかへし梅の一本

咲きかけ梅を一枝折って、輿のなかにある花筒にさして、毎日の楽しみにしようとしている。山崎の離宮八幡宮でも紅葉を一枝折って、江戸へ持ち帰っている。

### 旅のおわり

40日の旅を終え、江戸藩邸に到着した法鏡院は、出迎えた人々や苦楽をともにした従者たちと喜びをわかちあひながら、酒を酌み交わし、夜遅くまで語り明かしている。そして日記は次の一文をもって擱筆されている。

これそうとん花<sup>9)</sup>と、言葉のかすかず祝し、心落付ぬ。

この旅から10年後の安政3（1856）年12月24日、法鏡院は68歳の生涯を閉じている。

### おわりに

筆者が法鏡院の『帰府の記』を知ったのは、平成18年度特別展の準備のため、法鏡院関係の資料を山口県文書館や毛利博物館などで調査していく過程においてであった。

肝心の紹介の方は、表面的事項の説明になってしまった感が強く、史料の読みや解釈にも不十分なところが多いかと思われるが、これまで取り上げられていない資料ということで、存在を知っていただく目的で執筆した次第である。

なお、『帰府の記』は、鳥取の古文書解読グループの方たちとともに解読中である。別の機会に全文を翻刻したものを掲載する予定である。

最後に、調査に関してはお世話になった毛利博物館学芸員の柴原直樹氏に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

### 註

- 1) 鳥取市歴史博物館 2004 姫君姉妹『吉岡温泉滞在日記』樽谿叢書 第1集。原本は鳥取県立図書館蔵 『吉岡の日記上・下』2巻 鷺見休明
- 2) 三津子・庸子それぞれの旅日記は、九州大学文学部（「鷺見文庫」）に所蔵されている。ちなみに庸子の旅日記「木曾道おぼえ書」は鳥取近世女性史研究会によって全文が翻刻されている。（鳥取近世女性史研究会 2001「木曾道おぼえ書」（翻刻）『江戸期おんな考』第12号 桂文庫）
- 3) 西林節子 2001「木曾道おぼえ書」について『江戸期おんな考』第12号 桂文庫
- 4) 柴 桂子 2005『近世の女旅日記事典』東京堂出版

- 5) 柴 桂子 1997『近世おんな旅日記』 吉川弘文館
- 6) 毛利家文庫「法鏡院(斉熙室)様御国御下り控」 山口県文書館蔵
- 7) 丸山雍成／監修 梶洸／編 2000『山崎通郡山宿椿之本陣宿帳』 向陽書房
- 8) 4) と同。同書で柴氏が整理された百余点の旅日記と、『帰府の記』とは、関心・興味などで共通する部分が多い。

その点で『帰府の記』は定石を踏まえた旅日記の一つと位置づけられるであろう。

- 9) 優曇花。きわめてまれなことのたとえに用いられる。

## 凡 例

引用史料のうち、二文字以上の繰り返し符号は、ひらがなに変えた。